

## 北村季吟古典注釈の方法

— 先行説引用における一事実 —

佐 藤 恒 雄

『新古今集』巻三・夏歌（201）に収められる歌、

入道前関白，右大臣に侍りける時，百首歌よませ侍りける，  
郭公の歌 皇太后宮大夫俊成

むかし思ふ草の庵の夜の雨に 涙な添へそ山郭公

は、俊成（1114—1204）の数ある名歌中にあっても、特に人口に膾炙した一首であるが、この歌について北村季吟（1624—1705）は次のような注解を施している。（引用文中の漢詩句の訓点、ふりがな、送りがななどは一切省略する。以下同じ。）

野州、宗祇、説異也。宗祇云、此歌の心、大形の草の庵さへ哀深かるべきを、夜の雨しめやかにて、思ひのこすかたなきまゝ、廬山の昔のねざめまで心のそこにかび侍る折ふし、山郭公うち侘て事とふこゑなど、いかばかりにか侍らん。只今ことわりしらぬ身にだにこそ、筆もさしおかれ侍れ。野州云、我都に住ける時は、草庵などはうき事のやうに聞思ひしに、世をのがれて、此草の庵に住て、夜もすがら雨の音をきくに、心も一入澄まさりて、感情おほし。かゝる面白き事の草庵などにあらんとは知ざりし事とおもふ折ふし、郭公の声をきけば、悲しき事のせんかたもなし。雨を聞て慰む折ふしなれば、涙なそへそと、人に物をいふごとくに時鳥にことわる歌也。言語道断の所也。詩に、蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中 白楽天、邊檐点滴如琴筑 支枕幽齋聽始奇 憶在錦城歌吹海 七年夜雨不曾知 陸務観。古人はいづれも夜の雨を面白き事にいひ侍り 是迄野州。猶此外も説々あれど、とるにたらざるべし。愚意は、祇註感深し。しかれども所好にしたがふべきにやとて、両説双べ註し侍し。 （『八代集抄』）

宗祇（1421—1502）の注（『自讃歌註』）と野州すなわち東常縁（1401—1494）の注とを並記し、季吟自身は宗祇注の方をよしとするのであるが、季吟が「野

州云」として引くのは『新古今和歌集聞書』のことであって、その本文は次のとおりである。

吾都に住ける時は、草の庵などはうき事のやうに聞思ひしに、世をのがれて此草の庵に終夜雨のをとを聞に、心も一入澄まさりて、感情多し。かゝる面白き事の草の庵などにあらんとはしらざりし事よとおもふ折節、時鳥の声をきけば、悲しき事のせんかたもなし。雨を聞てなくさむ折節なれば、泪なそへそと、人に物をいふごとく、時鳥に理たる歌也。言語道断所也。或詩に、  
 蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中、又、憶在錦城歌吹海 七年夜雨不曾知、  
 又、三休詩 半夜灯前十年事 一時和雨到心頭、又、同 年老心閑無外事 麻衣草坐亦容身。古人はいづれも夜雨を面白事に云侍り。（内閣文庫本による）  
 この『聞書』は、『新古今集』の最初の注釈書であったが、後に細川幽斎(1534—1610)が増補した同名の書がよく流布し、季吟が『八代集抄』執筆の際抛りどころにした「野州注」も、実はこの系統の本文であったことが確かめられる。そして季吟は幽斎による増補や改変をも野州の説だと誤解しているところも多いのであるが、しかし、いま問題にする部分に関する限り、幽斎は何ら手を加えていないから、ことを野州注と季吟との関係として考えてさしつかえはない。

さて、俊成のこの歌が、白楽天の「廬山草堂夜雨独宿寄牛二李七庾三十二員外」詩

丹霄携手三君子  
 白髮垂頭一病翁  
 蘭省花時錦帳下  
 廬山夜雨草庵中  
 終身膠漆心応在  
 半路雲泥迹不同  
 唯有無生三昧觀  
 榮枯一照兩成空

朝廷で手をにぎりあって仲よくしている三人の君子、こちらは白毛頭をたれる病身の一老翁。

君らは秘書省で花咲く時節に、錦のとばりの下で得意にしていられようが、僕は廬山の雨ふる晩に、草ぶきの庵の中でくすぶっている。

終生、漆(うるし)と膠(にかわ)をまぜたようなかたい友情をとっていた、あのお心はもちつづけて下さっていようが、人生の途中で、経歴は雲と泥とのちがいとなった。

しかし、あの生もなく死もない静かな悟りの心境からいえば、栄枯も一たびその光に照らされたがさいご、ふたつとも空(くう)となってしまうのだ。  
(中国詩人選集『白居易下』高木正一訳)

の第三第四句を踏まえたものであることは、古来諸注が等しく注意してきたところであるが、ただ、草庵で聞く夜の雨をいかなる心情で理解するかという点で、大きく二つの説にわかれる。すなわち、野州のように、それを未だ気づかなかった「面白き事」ととらえるか、懐旧の念やみがたく、寂寥悲愁の情を喚起するものと受けとるかという対立なのであるが、近時における注釈まで含めて、圧倒的に後者が優勢であり、またそう解されねばならない。それは、定家(1162—1241)が明らかに同じ詩句を、

蘭省の花の錦の面影に庵りかなしき秋のむら雨

と詠んでいることによっても、また、正徹(1381—1459)が源為憲の「代迂陵島人感恩詩」(『本朝麗藻』)中の、

故郷有母秋風涙 旅館無人暮雨魂

と同じトーンの詩句として一具にいいなしている(『正徹物語』下38)ことによっても、さらにまた、内閣文庫本『自讃歌聞書』も、

蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中、と云詩の心也。時鳥を聞ば、いよいよ昔の恋しきを催すに、泪なそへそと云る心也。昔思ふと云るは、蘭省の花の時と云心也。今涙を催すは草庵の中也。

と注して、懐旧の涙を催すものとして理解していたらしいことなどに徴しても明瞭で、中世以降を通じて、草庵夜雨の詩情は、「閑居の気味」よりも、懐旧の念と涙をともなった幽暗な趣きに傾いていたのである。つまり野州の理解はどうみても少数意見以上のものではなかったわけで、季吟がこれをとらず宗祇注に惹かれたことの必然性は十分すぎるほどに理解できるのである。

しかし、いまここで問題にしたいのはそのような扱い方の当否ではなく、実は季吟が『聞書』を引用した、その態度・方法に関してである。

季吟はほぼ忠実に原拠たる『聞書』を引いているけれども、両者の間には大きな相違点もある。それはもっぱら詩句の引用部分に関わっていて、次のように二項目にまとめることができる。第一は、陸游の「冬夜聴雨戯作」詩の引用について、野州が二句しか引いていなかったにもかかわらず、季吟はさらに二句を加えて、結局一つの詩全体を掲出し、また作者をも書き加えたこと、第二は、『三体詩』の二つの詩から引用していた合計四句をすべて切りすてしてしまったこと、である。季吟はなぜこのようなことをあえてしたのか。

そもそも、野州がこれらの詩句を列挙したのは、「古人はいづれも夜雨を面白事に云侍り」ということの詳細例を提示するためにほかならなかった。そのことに思いをいたし、以上二つの相違点の個々を検討してみると、季吟があえて原拠本文を改変したことの意味はおのずと明白になる。

まず第一の陸游の詩は、季吟所引の四句がすべてであるが、念のため一度掲げる。

#### 冬夜聴雨戯作

遠檐点滴如琴筑  
支枕幽斋聴始奇  
憶在錦城歌吹海  
七年夜雨不曾知

軒ばをめぐってしたたる雨だれの音は琴や筑を奏するかのようだ。

しずかな部屋の中で枕によりかかってそれを聞き、はじめてその風韻を知った。

思い起こせば、蜀の成都で歌舞音曲の賑やかな市中に住んでいた、あの七年間は、夜雨のこのような面白い趣きをかつて知らなかったのだ。

(簡野道明『和漢名詩類撰評釈』の訳文をもとに若干私に手を加えた。)

野州の引く第三四句にはたしかに「夜雨」は出てくるが、都の喧噪の中に居た間は、そのよさに気づかなかったというのみで、夜雨の趣きはむしろ第一二句の方に端的に表現されている。軒ばをめぐってしたたる雨だれの音を「如琴筑」

と把え、それを幽齋に居て聞く時、はじめて「奇」なりと、それまでは気づかなかった夜雨の風韻を発見する、というのであるから、この二句をこそ例証として挙げるべきだと考えないわけにはゆかない。要するにこの詩全体が夜雨の面白き風韻を感取し表現したものであった故に、季吟は前半二句を補ったに違いないのである。そして作者名を明記したことともども考えるならば、季吟は明らかに陸枚翁の詩にあたりなおすという周到な態度で引用にのぞんだのであった。

第二の『三体詩』から引用の四句は、次の二つの詩の一部である。

旅 懐 杜荀鶴

月華星彩坐来収  
 嶽色江声暗結愁  
 半夜灯前十年事  
 一時和雨到心頭

月の光星のきらめきはいつとはなしにうすれゆき、  
 山の色江の流れる音が、ひそかに憂うつな思いをこりかたまらせる。  
 夜ふけて灯の前に眠らずにいと、十年來のさまざまなできごとが、  
 雨の音とともにどっと胸の中におしよせてくる。

答韋丹 僧靈徹

年老心閑無外事  
 麻衣草坐亦容身  
 相逢尽道休官去  
 林下何曾見一人

すでに年老い心のどかにして世間のことはいっさい気にかけない。  
 麻の衣草のしきものでも、この身ひとつをおくには十分だ。  
 出あう人々はみな官職を捨てて隠退したいなどというが、  
 いまだかつて浮世を離れた山林の中で一人として見かけたことはない。

(新訂 中国古典撰『三体詩』村山哲見訳)

野州引用の「旅懐」詩は、第一二句の表現、特に二句の「暗結愁」から推して、旅中のわびしい夜の憂愁の思いをうたったもので、夜ふけの灯下で、あま

つさえ雨の音が加わると、その雨にこたえるかのように、十年來のさまざまなことが心頭においてくるという。そのような思いをもたらず夜の雨が、「面白き事」であろうわけはない。つまり、野州の意図にそぐわぬ例証であった故の削除だと考えて誤らないであろう。一方「答草丹」詩には、たしかに暗さはなく、草庵における生活のいわば「閑居の気味」をうたっているのであるが、しかしこの場合、肝心の「夜雨」は詩の表面はもとより背景にすらあらわれない。その意味でこれもまた、野州の立証しようとしたことがらを証拠だてる材料にはならないはずで、季吟がこれを削除した理由もむしろそのこと以外には考え難い。そしてこれらの場合にも季吟は、原詩にあたりなおして確かめるといふ手順を踏んでいたこと明らかである。

以上を要するに、季吟は俊成歌の注釈のために野州説を引用するにあたり、その意図にそぐわぬ例証を切りすて、逆に足らざるを補って、よりすっきりした形で野州説を提示しようとしたのであった。そのような方法は、今日いうところの「引用」の概念とかなり隔った、明らかに異質のものではあるが、少くとも季吟はこの場合、たしかに一つの見識を示したのだとはいってよいであろう。それは決して博覧強記をほこるペダンティックな姿勢がもたらしたものではない、と私には思われる。

季吟はおびたしい数の古典注釈を残した有数の古典学者であったが、しかし、その業績に対する評価は、たとえば次のような意見に代表される。

諸抄を集成し、実用的便宜的な形で（中略）龐大な著述を選述し、学問を一般に普及した功績は、たしかにわが国文学研究上特筆すべきものがある。しかし、その学問内容は博引傍証を誇り、諸説を並記するのみで、彼自身の判断を明瞭にしないばかりか、取捨選択さえ十分に行われていない。その精神的な仕事ぶりとして上述の学問の普及の点では敬服するが、そのもの自体の独自の学問的価値、及び学問的方法論より見れば安易な集成に止まっていて、甚だ物足りない。（小高敏郎「貞徳・季吟」文学 昭30.11）

季吟における古典注釈を総合判断すれば、あるいはこのような評価に近いところへ落ちつくことになるのかもしれない。しかし、ことを微細に検討してゆくならば、以上に例示したような用意周到な配慮のあとを看取することもできる

わけで、引用したり、諸注を並記したりするということの現象面だけをみて、だから価値は低い、というところへ短絡してはならないのではあるまいか。これに限らず子細にみれば（といっても新古今注のみだが）、季吟の引用はかなりきびしい取捨の原理の上に成り立っているように思われる。引用もまた創作の一つの形であるとするならば、季吟の場合にはむしろその引用の原理や方法の内部をこそ照射してみる必要を痛感するのである。